

実行委員長による総括

国立民族学博物館 林 勲男

なぜ語り継ぎに関するフォーラムなのか

多くの被災地で、災害の体験や教訓を言葉や映像、事物や記念碑、芸術活動など様々なかたちで語り継いでいこうとする活動が生まれている。そうした活動は、地域の歴史を伝え、人々との絆や自然との共存の在り方、そしてかけがえのない命の大切さを考えさせるものである。語り継ぎは、生命や環境を守るという人びとの意識を高め、被災地の復興や、災害に強い地域づくりを進める原動力にもなり、さらには地域を越えた連帯の意識を生み出すなど、社会全体にとって多くの可能性をもった重要な活動である。世界各地の災害被災地では、こうした語り継ぎへの取り組みがおこなわれている一方で、個別の活動を繋ぐ情報の交換や交流の促進のためのネットワークがいまだ形成されていない。

このような問題意識のもと、世界各地で災害の語り継ぎに取り組む人々の交流を深めること、語り継ぎの重要性を広く訴えること、語り継ぎの意義やあり方を検討しあうこと、災害の語り継ぎを各地でさらに促進し、将来の災害に立ち向かう力を育むことを目的としてこのフォーラムは開催された。

フォーラムとは、人びとが集い対等の立場で情報や意見を交換しあえる場のことである。そして参加者がそれぞれの活動の実態と課題について認識を深めていくとともに、相互理解に基づく実践の場でもある。つまり、参加者が活動の中で疑問に思っていること、解決策を見つけようとしていること、活動を通じて模索していることを率直に出し合い、共に考え、たとえ答えはすぐに得られなくとも、新たな考え方の道筋やヒントを発見するための実践の場である。災害の語り継ぎは、被災体験を持つ住民、研究者、教師、災害対応に当たる実務者など様々な立場の人びとによって担われている。中には何世代も前の災害について語り継いでいこうとする人びともいる。それら各々の立場や専門性を尊重しつつ、対等の立場で災害の語り継ぎについて話し合う場として、このフォーラムを設定した。

公開シンポジウム「災害体験の語り継ぎを考える」

初日には、鼎談とパネルディスカッションの二部構成による公開シンポジウムを開催した。鼎談では三者が、研究者として、教師として、そして国際文化交流事業と新たな被災地支援活動の実践者として、阪神・淡路大震災の体験を実践にいかにかつて結実させていったかが語られた。強い意志と使命感を持って、それぞれの災害体験を語り継ぎ、将来の防災や被災地支援に貢献しようとする話は、聴衆の心を強く打つものがあった。被災者としての体験を別の災害被災地の支援に生かしたティン・エイ・エイ・コ氏の活動は、かつての被災地が新たな被災地を様々なかたちで支援するという、支援の連鎖の世界的広がりを具体

的に示すものであり、実践を支える個人の熱意に触れながら傾聴した。臼井真氏作詞・作曲の「しあわせ運べるように」を参加者全員で歌ったことで、災害の語り継ぎにおける歌あるいは音楽が果たす役割の大きさを、会場の誰もが感じた事であろう。今回のフォーラムでは直接的には取り上げなかったが、人間の感性や情動に訴えかける芸術作品という語り継ぎの在り方についても、その実践例の収集や効果についての検討は必要であろう。

パネルディスカッションでは、三名のパネリストによるそれぞれの組織の活動報告と、それに対する二名のコメントを踏まえて討論を行なった。既存の様々な格差を前提とした国際協力の在り方や、体験者の高齢化や人口の流動化さらには地球温暖化に伴う気象災害の激化が進む中で、国際的な語り継ぎ活動の役割やその効果的な方法の検討といった、新たな課題も鮮明化された。世界を見渡せば、常にどこかで災害は発生し、生活再建・復興への取り組みがおこなわれている。他の被災地の現状を我が事として捉え、支援の手を差し伸べるとともに、自らの防災・減災に常に意識を向けることが大切であろう。また、今回のフォーラムへの参加者は、災害語り継ぎの先導者でもあり、それぞれの活動の立ち上げ方や運営の仕方などを後に続こうとする人びとに伝えるためには、その方法論の確立（ナレッジ・マネジメント）への期待も大きい。

災害語り継ぎの動機、目的、意義、方法

フォーラムには三つのテーマが設定されていた。

1. 災害体験やその教訓をなぜ、誰に対して、何のために語り継ぐのか。
2. 語り継ぎの語り手にとって、受け手にとって、被災地にとってその意義は何か、
3. 語り継ぎの効果的なものにするにはいかなる方法があるのか。

これらに配慮したうえで、世界22か所の被災地から語り継ぎ活動の報告がなされた。

語り継ぎの動機と目的、そして意義

個人の災害体験は多種多様であり、語り継ごうとする動機も千差万別である。また、本フォーラムの英語タイトルには「教訓 (Live Lessons)」が入っているが、災害体験の語り継ぎのすべてが教訓を伝えようとするものであるとは限らない。たとえ教訓として後世や他の人びとに伝えようとしても、それが果たして有効なものであるかどうかは、ハザードの種類や社会環境または住環境などの諸条件に左右される。だが、「教訓とはならないから」あるいは「防災や減災に役立たないから」といって、それらの語りが無意味だとは決して言えない。体験を語り継ごうとする動機があるかぎり、少なくともその本人にとっては意義のある行為であり、それはとりもなおさず「生の重み」を伝えるものだと言えよう。同様に、全ての災害体験の語り継ぎに合理的な目的があるとも限らない。災害体験を個人史の一コマとして語ることで、自らの生の意味を、そして自分と関わりのあった人びとの存在の意味を繰り返し見つめようすることもあるだろう。

また時として、一人の人間の中で、「体験」「記憶」「語り」が一つの流れとして形成されないこともありうる。体験を伝えることは大切だと思いながらも、語れない現実を生きている人びとがいる。思い出そうとすると、語ろうとすると災害の体験そのものが蘇ってしまう。そうした人びとにとっては、災害の体験は決して過去のものではなく、「思い出す」という行為によって、「今まさに生起する」体験となってしまうのである。こうした記憶や想起の問題は、戦争や紛争の記憶をめぐるこれまで議論されてきたが、自然災害の体験についてもあてはまる。

それでもやはり私たちは未来のために、未来を生きる人びとのために災害の体験や、その記録や記憶を語り継いでいかなければならない。フォーラム初日の鼎談で、臼井真氏は「生き残った者の義務として語り継ぐべき」と言われた。そこには強靱な意志が求められている。

発生そのものが人間に起因する戦争や紛争とは異なり、人間だけの力で自然界から発せられるエネルギーを押さえつけることはできない。その意味では、災害因は常に潜在し、将来も災害は起り続けるであろう。そうした自然災害に対峙して生きなければならない人間は、過去の災害体験からの英知を将来の災害対応に生かさなければならない。そのために私たちは、私たち自身や先人たちの災害体験を、その記憶を未来に伝えなければならない。すべての個人がそれを実行するには限界がある。人は歳をとり、やがては死んでいく。時の経過の中で、地域社会そのものも構成員が変化し、産業構造が変わり、交通・通信網も変化していく。個人を越えたところで、数多くの災害体験の中から将来の防災や減災へ寄与する形式知を抽出し、社会としてシステム化した継承の在り方が必要となる。そのことは、個々の体験やその記憶を排除しようとするものでは決してない。

語り継ぎの効果的方法

自然災害というと、自然界からの巨大なエネルギーによって建造物が破壊され、人命が失われたり傷つけられたりすることに目を奪われがちである。しかし、災害とはそうした自然界の力だけが原因ではなく、それに加えて、建造物や通信網などをつくりあげる人間の技術、そして政治や経済を含めた社会・文化の在り方、これらすべての複雑な関係性の中で発生するものなのである。したがって技術の高度化や人口や情報の集中化などにより、災害の様相も複雑化している。また災害からの復興も、インフラの復旧や住宅などの再建だけで達せられるものではない。災害によって被害を受けるのは、建造物だけでなく、心の問題、社会の問題、文化の問題も等閑にはできない。語り継ぎの効果はこれらの再建・復興のプロセスと、将来の災害に対する脆弱性の縮減と対応力の増強のプロセスに現れるであろう。

「語り継ぎ」には、人が言葉で語り継ぐ行為以外に、写真や映像、遺留品や事物、記念碑、音楽や絵画などによるものも含むとした。言葉以外のメディアは、言葉によって補われて初めてメッセージを正確に伝えることができる場合もあれば、時に言葉の表現力を越

えて、受け手にメッセージを伝えることもできる。当然のことながら、そこには受け手側の解読・解釈力に依存する部分も少なくない。メッセージを伝えるための効果的手段や方法の検討には、同時に解読・解釈する力をいかに育むかの検討も必要であろう。

災害体験そのものは個人によるものであるが、それを客観的な事実の中に捉えなおすことで、そのメッセージ性はより高まるであろう。そのためには、出来事としての災害を正確に理解することが必要であり、そこで求められるのは災害因の解明である。災害因にはハザードに加え、地理的環境、建造物に使われる技術力、社会的・文化的要因、情報の流通状況などがあげられる。様々な分野の専門家による貢献が期待される。

フォーラム二日目には、「語り継ぎとミュージアム」「語り継ぎと防災」「語り継ぎとメディア」「語り継ぎと交流」に関するセッションが開催された。このうち「語り継ぎとミュージアム」はハザードによって三つのセッションが組まれた。そのうちのひとつで、世界博物館協議会（ICOM）のマリーーポール・ユングブルート氏は、ミュージアムの基本的機能を①収集と保存、②調査・研究、③有形・無形物の展示とした上で、出来事としての災害を災害因の接合プロセスとして提示すると同時に、災害直後の状況だけでなく長期的な復興のプロセスをも情報として提供すべきと指摘した。この点、神戸にある人と防災未来センターは、多様な立場の人びとの視点から阪神・淡路大震災からの復興についても展示している。ただ、これはほとんどの災害ミュージアムに言えることであるが、災害因のうちの社会的・文化的要因に関する研究成果をさらに取り込むことが重要と考える。

災害による被害の大小や、生活再建の進捗にはエスニシティやジェンダー、貧富の格差などがその背景にある場合が多い。歴史展示は、社会にとっての記憶と忘却にも関与するものであり、おのずから定型化された記憶とその背後の多様な記憶という構図を創り出す。ミュージアムにおける歴史展示とは、記憶の選択、記憶をめぐるせめぎ合いの場なのである。歴史の叙述・描写を重視するか、将来の防災・減災を重視するかは各ミュージアム設立目的の違いもあり、テーマとして取り扱いが難しいのは事実であるが、果敢な取り組みを期待したい。

現在、ミュージアムは大きな変容を遂げつつある。作品や資料などの「モノ」に出会い、学ぶ場としてのミュージアムから、それら「モノ」を介して人と人が出会い、さらにはそうした出会いから得たものを育てていく機能をも持った場へと変化している。「次世代ミュージアム」とも呼ばれることもあるが、すでに多くのミュージアムがこうしたフォーラムとしての機能や活動を拡充しつつある。そうした流れの中で、視覚中心の学びの場から全感覚を使って参加することから学ぶ場へ、展示を介しての情報の伝達から、様々な媒体（オーディオ・ヴィジュアル機器、ワークシート、イベント、ワークショップ、解説者などのメディア）を介して自らの世界を拡大・育成する場へと、災害ミュージアムも変容していくことであろう。さらには、ミュージアムの外で展開する多様な語り継ぎ活動に関する情報を発信するとともに、それらを繋ぐ機能も期待される。

おわりに

阪神・淡路大震災の10周年にあたる2005年1月に、神戸において国連防災世界会議が開催され、その1年後の2006年1月、今回のフォーラムの母体となる「世界災害語り継ぎネットワーク (International Disaster Transfer Live Lessons Network、通称 Tell-Net)」が設立された。そして設立から4年後に、「世界災害語り継ぎフォーラム」を同じ神戸の地で開催することができた。災害語り継ぎは、被災地という場とは切り離せないであろう。

今後しばらくは、フォーラムでの報告の概要と資料、各セッションのまとめ、それらを補足する災害語り継ぎ活動に関する情報などをウェブサイトに掲載する作業を進めていく。将来的には、参加者間に限らず、災害語り継ぎに関心を持つより多くの人びとの間での情報の共有と交流の促進、そしてその結果として、災害被災地の復興や将来の防災・減災に結びつく活動を活性化に貢献するポータルサイトの構築を目指していく。同時に次回のフォーラム開催の可能性をも検討していく。

以上